

浦野康彦（浦野源吾）家文書目録と目録作成について

- 1 本文書は、市内常盤町の浦野康彦氏が所蔵する文書である。

浦野康彦（浦野源吾）家文書は、浦野家では門外不出の家宝として保存されてきた文書群である。昭和2年、浦野源吾氏の英断で上田中学校藤沢直枝教授の懇望に応じて貸し出され、『川中島戦史』の中で「浦野家ノ合戦図参照」と初めて公開された史料群である。

これまで浦野家数代にわたる多量の史料が受け継がれてきている。

- 2 この「川中島合戦図」史料を公開して以来、貴重な文書群の所在が知られるようになり、須坂町第二回古文書展の時（昭和15年11月23日、於須坂小学校常盤部、上高井教育会主催）同家文書の何十点が展示公開された。

この時、文書群の一部が「東昌寺開基並世代記控」として手書きの目録（旧史料目録）が作成された。この古文書展の講師を務めた岩崎長思（初代須坂中学校長）が浦野家文書の講評を行い、その記録が残されている。そこでは、浦野家文書の価値を以下のようにまとめて紹介している。

- ① 「東昌寺開基並世代記」 当家は須坂にあつては奉行客分待遇を受け、須坂藩主堀氏との関係は興味深いが、堀家の家臣ではない。鎌倉時代には、小県郡浦野にあつて、一城の城主であり、また地頭的立場にあつたとされる。
- ② 「長野県辞令」 これは未だかつて見たことのない文書であるが、書体から見て兄の北村方義の書体で類例のない面白いものである。
- ③ 「東山道出張日記」「堀直明感状」「須坂藩感状」「須坂藩辞令」 この4点は、勤皇方の浦野本次郎関係の文書で、須坂の代表的人物であり『人物誌』には是非入れるべき人物である。
- ④ 「川中島合戦図」「甲越信戦録」「甲陽軍鑑」は、伝わる家によって多少の違いはあるが、熟読してみると面白い。
- ⑤ 「信濃国大地震満水録」「須坂町絵図（寛政4年）」「須坂藩陣屋図」は佳品にして、多くの人に知らしめるべき逸品である。
- ⑥ 「奥田招魂社両社寄附地証書」 奥田・招魂両社に関する唯一の史料である。
- ⑦ このほか、心学関係文書・桃源舎錦洞評・須坂藩家老日記・見聞録などは当時を知る良い史料である。

- 3 これらの史料を「浦野康彦（浦野源吾）家文書目録」として、目録を作成した。『須坂市域の史料目録』の連番整理番号「076」（76番目）に位置づけ、史料番号は「076-A-1」から開始して、整理ラベルを貼付した。

文書目録の配置は、時系列を主としたが、一部には年代が確定できないものが

あり必ずしもそうなっていない。史料総点数は、607 点を数える。

分類は旧史料目録作成時の分類を参考にし、以下のようにした。

記号	分類項目	史料番号	史料点数
A	旧史料目録関連（江戸期中心）	271	358
B	典籍	105	106
C	浦野氏系譜関連	56	107
D	卷子・軸	33	36
合 計		465	607

- 4 史料目録の作成に当たっては史料活用の便を考慮して、以下のようにした。
- (1) 史料名は、原則として史料中に記載された表題を記したが、無表題史料には（ ）を用いて仮表題を作成して掲げた。
- また、同一名史料や括りでまとめられた史料には枝番号をつけたものもある。
- (2) 史料形態については、次のように略記した。
- 横（横帳）、横半（横半帳）、 堅（堅帳）、 紙（一紙）、 折（折本等）綴、 軸（掛軸・軸装物）、 冊（典籍・冊子）、など
- (3) 一紙文書で軸装された史料は、形態を軸とした。
- (4) 旧史料目録作成時に整理した封書番号は、そのまま備考欄に記載した。
- 5 旧史料目録「東昌寺開基並世代記控」に記載された史料の中には、散逸していると思われるものがある。また、旧史料目録には記載されていないものについては、新たに整理し目録に記載した。
- 6 この「浦野康彦家文書」には大変貴重な文書が多く、本史料目録が研究者に限らず多くの須坂市民に活用されることを期待する。さらなる史料調査・研究の発展を願う。
- 7 本史料目録は、浦野康彦氏のご理解とご協力を得て、須坂市誌編さん室の下記専門員が分担して作成した。

涌井二夫 浅沼彌吉 田子修一 大塚尚三

2018 年 3 月 30 日

須坂市誌編さん室